

# 礼儀・節度・思いやりを育てるために

—自己および他者を人間として大切にすゝ心情や態度を養う道徳教育—

浦添市立浦添中学校教諭

濱比嘉 五十美

---

## 目 次

I	テーマ設定理由	1
II	研究目標	1
III	研究仮説	2
IV	研究内容	2
1	新学習指導要領の内容	2
2	実態把握	
(1)	HUMN（道德適性検査）より	3
(2)	「礼儀に関するアンケート」より	3
I	基本的な生活習慣について	4
II	「礼儀」について	5
3	理論研究	
(1)	道德と礼儀について	7
(2)	いじめと礼儀指導	9
(3)	道德指導過程の定型	10
(4)	日常の道德指導	11
(5)	道德資料について	13
(6)	指導方法	14
V	研究のための主な参考文献	15
VI	検証授業指導案	16
	* 本時の展開表	19
VII	研究のまとめ	
1	研究の成果	20
2	今後の課題	20

# 礼儀・節度・思いやりを育てるために

－ 自己および他者を人間として大切にす心情や態度を養う道徳教育 －

## I テーマ設定の理由

いじめ、自殺、恐喝、窃盗、万引きなど犯罪にかかわる中学生の行為が社会的問題となって久しい。それは、今日一向に治まっていない現状である。そんな大きな事件ではなくても、日常生活の中でも、目にし、耳にする生徒の言動は目にあまるものがある。他人の物を勝手に「借りて」盗難事件を起こしたり、言動の粗暴さや自己本意な考え方・行為が周りの人や相手を不快にさせたり、友人同士の衝突やいざこざは後を立たない。

このような現象はどのようにして生まれたか。あいさつができない（しない）。言葉遣いが悪い（正しくできない）。社会的な人間関係（親子関係・教師と生徒の関係等）の認識の欠如。時間、物に対するけじめのなさが引き起こすトラブル等、礼儀・節度に関する基本的生活習慣の不定着が考えられる。要するに、きちんとした社会的ルール（躰）が身につけてなくて、人間関係がうまくいかないことによる現象だととらえるのである。今日の中学生在が引き起こす様々な社会問題も根は同じだと考えられる。道徳的規範がゆるんできた昨今、社会的ルールを躰られていない子どもたちが増えてきたのかも知れない。健やかな子どもの育成は平和国家の礎である。現状を認識し、己の存在が認められ役立つ個性豊かな社会、人と人との関係が円満で、充実した住みよい社会を築いていく主体性のある子どもを育成することは急務である。

学習指導要領「総則」2の「道徳教育の充実」の中で、道徳教育を進めるに当たって配慮すべき事項(2)は次のように示している。「家庭や地域社会との連携を図り、日常生活における基本的な生活習慣や望ましい人間関係の育成などにかかわる道徳的実践が促されるようにすること」。また、学習指導要領の「道徳」の目標には、「人間尊重の精神」がはっきりと唱われている。「基本的生活習慣」（礼儀）・「望ましい人間関係」（節度・けじめ）の根底にあるのは「人間尊重」（思いやり）の精神なのである。

礼儀・節度は自分と他との関係を円滑にし、人間を大切に思う心と態度である。そこから思いやりも育つ。長老を敬い、幼き者を慈しむ心、友人を大切にすけじめある接し方、己を内省できる謙虚さを育てたい。そうすることによって、子どもは、学校や未来の社会において、安全で自由に個性が伸ばせる。また、他者との摩擦もなく、人を思いやる心も育つ。

本研究は、先の子どもの現状を踏まえ、礼儀をわきまえ、節度正しい生活をするることにより、人間らしい生き方ができる社会が創れるという意識を育てるためのものである。

## II 研究目標

本研究は礼儀・節度を実践することによって、思いやりの心を育み、日常生活の規律と安定を保持していく意識を育てるためのものである。

### III 研究仮説

道徳教育で礼儀・節度の大切さを理解することによって、思いやりを学び、自己および他者を人間として尊重する心情や態度が培われるであろう。

### IV 研究内容

#### 1 新学習指導要領の内容

##### (1) 4つ視点

- 視点1 主として自分自身に関すること
- 視点2 主として他の人とのかかわりに関すること
- 視点3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること
- 視点4 主として集団や社会とかかわりに関すること

##### (2) 22の価値項目の中、テーマにかかわるもの

###### 視点1-(1)

望ましい生活習慣を身につけ、心身の健康の増進を図り、節度と調和のある生活をするようにする。

###### 視点2-(1)

礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動ができるようにする。

###### 視点2-(2)

温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつようにする。

###### 視点2-(5)

それぞれの個性や立場を理解し、いろいろなものの見方や考えがあることを理解して、謙虚に他に学ぶ広い心をもつようにする。

##### (3) ・視点1と2の中で、共通部分として望ましい生活習慣があげられる。

社会性をもつ人間が、幼いころから（生まれ出たその時から）長期にわたり、繰り返し学習して身につけてきた行動様式（礼儀作法・みだしなみ・言葉遣い・立ち居振る舞いなど）は他とかかわりにおいて基本的必要素である。

・中学校において指導すべき内容3分野⑩項目の中テーマにかかわるものとして

###### ③ 礼儀作法・社会生活に関するもの

ア あいさつと言葉づかい

イ 自己および他者の人間として大切にす心情や態度

があげられる。

・視点2の(1)・(2)・(5)の共通部分として礼儀があげられる。

人間の内面（愛や思いやり一人間愛や人間尊重）は感謝のことばとして、あるいは謙虚な態度となって形（礼儀）に表れてくるからである。

## 2 実態把握

### (1) HUMN（道徳適性検査）

右の表は平成5年度のがわの県の道徳性検査の結果をまとめたものである。

- ・「本県の中学生の道徳性は、全国平均より低く、特に視点4が目だっている。」
- ・「本県の中学生の道徳性の側面は、道徳的心情、判断力ともに全国平均より低い。」

（資料 県義務教育課）

浦添市の平成5年6年の検査の結果でも、1の「強い意志」「自主自立」3の「畏敬の念」4の「公德心規則尊重」「勤労奉仕」「愛国心」「郷土愛」が望ましくない方向にあり、特に4が目立つ。学年にばらつきはあるが、これらが共通して2カ年続いているのは今後、指導を要するところである。

他の市として望ましくない傾向にずれているものは「理想の実現」「自然愛」である。

また、十分発達、不十分ともその差が多いものは「思いやり」「人間愛」「生命尊重」である。ある中学校では、平成5年は「郷土愛」6年では「礼儀」「思いやり」「信頼」「友情」「友情」が下向気味であった。

「礼儀」「節度」に関しては、浦添市全体で見れば、さほど問題はないようだ。しかし、現実には頭で分かっていることでも、実践となると彼らがきちんとしていないことは後のアンケートの結果でわかる。いずれにしても、「思いやり」「人間愛」「生命尊重」「公德心」「勤労奉仕」「畏敬の念」など、直接的、間接的に「礼儀」とかかわるところが弱いので、ここでも「礼儀・節度」の重要性が表れている。

検査項目	県全体の傾向	検査結果の概要
(1) 調和のある生活	M	十分発達した児童の割合も発達が不十分な児童の割合も全国と比べて多い。個性伸長の発達がよく、節度、強い意志、自主自立、理想の実現の発達が不十分である。
(1) 節度	↓	
(2) 強い意思	↓	
(3) 自主自律	↓	
(4) 理想の実現	↓	
(5) 向上心	M	全国と比較して、望ましい傾向にあるが、礼儀、感謝の発達が不十分である。
(1) 礼儀	↓	
(2) 思いやり人間愛	↑	
(2) 感謝（人間愛）	↓	
(3) 信頼・友情	M	
(4) 健全な異性観	↑	全国と比較して、望ましくない傾向にある。特に、自然愛や畏敬の念の道徳性の発達が不十分である。
(5) 謙虚寛容	↑	
(1) 自然愛	↓	
(1) 畏敬の念	↓	
(2) 生命尊重	M	
(3) 人間の強さ弱さ	↑	全国と比較して、望ましくない方向にある。公德心規則尊重、公正公平、勤労・奉仕、愛校心、郷土愛、愛国心の発達が不十分である。  全国と比較して、本県生徒の道徳性は望ましくない傾向にある。
(1) 集団生活の向上	M	
(2) 公德心規則尊重	↓	
(3) 正義・公正公平	↓	
(4) 勤労・奉仕	↓	
(5) 家族愛	M	
(6) 愛校心	↓	
(7) 郷土愛	↓	
(8) 愛国心	↓	
(9) 国際理解人権愛	M	

無印：同じ傾向  
 ↓：望ましい方向にずれている  
 ↑：望ましくない方向にずれている  
 M：十分発達も発達が不十分も、多い  
 A：十分発達も発達が不十分も、少ない

### (2) 「礼儀に関するアンケート」より・・・対象者 浦添中1、2、3年1クラス

# 1 基本的生活習慣について

## 1 「あいさつ」について

(1) いつも遣っている「あいさつ」は 単位 % (以下同)

	1 年			2 年			3 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
ア おはよう	77	82	81	85	94	89	72	100	85
イ いただきます	89	47	69	95	94	95	67	94	79
ウ ごちそうさま	89	59	75	95	94	95	67	94	79
エ 行ってきます	84	82	83	85	83	84	56	88	71
オ ただいま	79	82	81	90	83	87	72	88	79
カ ありがとう	63	82	72	95	83	89	89	100	94
キ ごめんなさい	53	41	47	55	61	58	56	69	62
ク すみません	47	41	44	50	39	45	56	31	44
ケ こんにちは	68	35	52	20	55	37	67	63	65
コ さようなら	53	29	42	75	50	63	33	63	47
サ おやすみなさい	42	59	50	50	67	58	39	69	53
シ 行ってらっしゃい	37	18	28	40	22	32	33	56	44
ス 失礼します	32	41	36	65	72	68	56	44	50
セ こんばんは	37	29	33	45	33	39	44	56	50
ソ バイバイ	74	94	83	80	72	76	83	94	88

\* おはよう (89%), 行ってきます (84%), いただきます (95%), ごちそうさま (95%), ありがとう (89%) については、かなり高い数値が出て好ましい状態である。バイバイ (76%) は、場合によっては「こんにちは」とか「やあ」の意味にも遣われている。(2年参照)

気になるのは、その他のあいさつの数値がかなり低いことである。「行ってきます」は言うが、「行ってらっしゃい」は32%しかない。「ただいま」は言うが、「お帰みなさい」はどうだろう。残念ながらアンケートの項目に入れてなくて確かめられない。「ごめんなさい」「すみません」の数値もやや低い。お礼言葉(ありがとう)は高学年になるに従って高くなっているが、謝り言葉はどの学年も傾向が似ている。これは後に出てくる対人関係のありようとも関係している。

### (2) 中学生になって一度も遣ったことのない「あいさつ」

「あばよ」「またな」「ハロー」は言葉遣いからして論外だとしても、ほぼ1, 2, 3年とも共通して「行ってらっしゃい」(男子15%・女子4%), 「おやすみ」(男子8%・女子5%), 「おはよう」8%, 「行ってきます」・「ごめんなさい」7%「いただきます」「すみません」の言えない生徒も僅かながらいるのである。いずれも男子が女子を上回っている。

### (3) 中学になって「あいさつ」はどうなったか。

	1 年			2 年			3 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
前よりするようになった	89	82	86	55	56	55	61	94	76
前ほどしない	11	12	11	45	44	45	39	6	24
全くしない	0	6	3	0	0	0	0	0	0

\* 1年生は男女ともにあいさつをよくやっているようだが、これは後で述べる理由、「先輩」の影響が大であることからうなずける。3年生は女子が一步大人で、やるのがあたりまえの感

があるが、男子はやや後退している。2年生はやる生徒とやらない生徒がやや半々ではっきりしている。

(4) 上の理由として、1年生は「先輩がいるから」「先輩にはやらないといけない・こわいから」が圧倒的で71%もある。(男子だけで88%)。「家の縁」は2年、3年とも全体の3分の1弱だが、「やるのがあたりまえ」と自覚している生徒が2年52%、3年62%もあり、「返ってくる返事がうれしい」も2年3年とほぼおなじ値15%くらいであった。

やらない理由として、「誰もしない」「声かけきれない」「無視される」とバラツキがある。全くしないのは1年の女子一人で、「ばかばかしい」であった。

## 2 言葉遣いについて

(1) どんな人に丁寧な言葉を使いますか。

敬語(丁寧語)については、どの学年も「先輩」が圧倒的に多く、続いて、1年生は「先生」「親戚」「近所の人」「初対面の人」、2年生は「近所の人」「初対面の人」「先生」の順となり、3年生にいたっては、「初対面の人」「親戚」「先生」の順。親と友人は最も低く、親しい友人にいたっては皆無に近い。

特に目立つのは、2年生の祖父母、父母、教師という身近な目上の人に対する敬愛の表現ができていない。友人と同様に「親しみを持つからこそ」とも考えられるが問題提起にすべきところである

	1年	2年	3年
□ 祖父	25	7	24
□ 父母	14	11	5
□ 先生	64	42	56
□ 先輩	51	71	82
□ 初対面の人	14	35	71
□ 親戚	11	26	59
□ 近所の人	18	59	47
□ 親しくない友人	17	24	9
□ 親しい友人	2	0	0

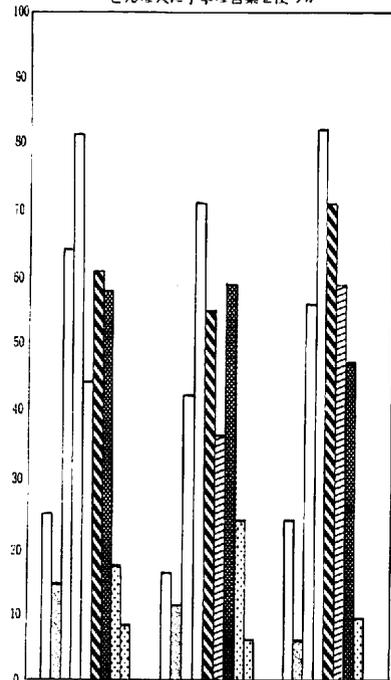
(2) 敬語を遣うのは抵抗はないようだ。

遣わない(抵抗がある)のは、1、2年とも「難しい」がその理由。3年は男子は「人間皆平等だから」。女子は「遣うのが恥ずかしいから」で、「難しいから」は男女とも半々だった。(図表略)

(3) どの学年も自分を指して、男子は「おれ」がトップ。2、3年は「わん(方言)」と続く。女子はどの学年も「自分の名前」で済まし、「わたし」というのは2、3年の6%くらいである。相手に対しては、1年男女とも「呼び捨て」。2年3年男子は「ヤア(方言)」。女子は「呼び捨て」。以下男子は「呼び捨て」「おまえ」と続き、女子は「～ちゃん」に変わる。

(図表略)

どんな人に丁寧な言葉を使うか



## II 「礼儀」について

(1) 友人に「礼」を尽くしますか。

	1年			2年			3年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
友人に礼を尽くす	4.7	6.5	5.6	3.5	6.7	5.0	4.4	6.3	5.3
友人には礼を尽くさない	5.3	3.5	4.4	5.0	3.3	4.2	5.6	3.8	4.7

(2) 何のために礼儀を尽くすのか。

	1 年			2 年			3 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
相手に失礼にならないため	63	71	67	65	83	74	7	63	65
相手を敬うため	5	12	8	20	28	24	1	31	21
仲良くするため	11	0	6	20	0	11	0	0	0
いい関係を保つため	11	24	17	25	22	24	1	31	21
社会を良くするため	0	0	0	10	6	8	6	6	9
印象を良くするため	5	0	8	10	11	11	1	6	9
その他	5	0	8	0	0	0	0	0	0

\* 礼儀の必要性としては、「相手に失礼にならないように」と考えている人が一番多く、「相手を敬う」、「いい関係を保つ」はかなり低い。

また、「親しき仲にも礼儀あり」というが、友人に対しては「礼を尽くさなくてもよい」と考えている人が、約半数いる。

(3) 礼儀を欠いたばかりに、被害を受けたり、加害者となったりした体験をあげさせたが、おもしろいことに、加害よりも被害の方が多い。自分がやったことよりも、された方は後々記憶に強く残るということか。これは、よいことをやってもらった時も同様であろう。

また、女子よりは男子にこの体験が多いこと。事象によっては学年間に差がないことが特徴。

	1 年			2 年			3 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
黙って人の物を借りた	42	29	36	40	28	34	50	19	35
借りて返さなかった	53	29	42	20	28	24	17	19	18
貸して返してもらえない	68	41	56	60	44	53	61	75	68
ぶつかってごめん言わない	53	41	47	10	6	8	28	0	15
謝ってもらえない	63	59	61	45	67	55	50	50	50
いやがることをした	74	29	53	55	33	45	61	38	50
いやがることをされた	68	47	58	50	56	53	56	31	44
悪口を言われた	37	18	28	15	33	24	33	31	32
持ち物を触られ盗まれる	58	41	50	55	39	47	56	44	50
時間に遅れ迷惑かける	26	18	22	30	22	26	33	25	29
友人のせいで遅刻する	11	6	8	0	11	5	11	13	12

(4) 逆に、礼儀にかなったことをされて、うれしかったことは、どの学年も「明るいあいさつ」が一番多い。この体験は女子の方が断然多いことが分かる。

	1 年			2 年			3 年		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
明るいあいさつが返る	37	94	64	50	78	63	72	75	74
紛失した物が届けられた	16	24	19	20	11	16	28	31	29
お礼状の返事がきた	11	24	18	0	17	8	8	0	3
バスで席を譲って喜ばれた	16	12	19	10	11	11	22	38	29
喧嘩した友人が謝った	16	41	28	15	33	24	11	25	18
礼儀正しい友人を褒められた	32	41	36	25	50	37	22	44	32

- (5) 「人は誰でも、他の人から好かれたい、認められたいという気持ちがあります。しかし、思春期にかかった若い人は、ときどき、逆の行動をして、他の人、特に、大人からは「礼儀知らず」「今時の中学生は」などと言われたり、友人から誤解され、それがもとで、トラブルが起こったりしますが、そのことについて、あなたはどのように考えますか。」

中学生の礼儀を欠いた言動に対しての意識調査は文章形式でまとめさせたので、ここではやや似た意見のものを分類して、パーセンテージで表してみたのが次の表である。

	1 年 年			2 年 年			3 年 年			全 体		
	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全
分からない・気にしない	68	41	56	65	16	42	33	0	18	55	24	40
時期だから仕方がない	11	18	14	5	22	13	44	32	38	10	17	13
いけない事だ・礼儀が必要	21	18	19	15	28	21	17	50	32	18	26	21
大人が悪く見ている。理解して	0	18	8	10	22	16	6	6	6	12	22	16
周りの人が教えるべき	0	0	0	0	6	3	0	6	3	2	9	3
自分の考えを言うべき	0	5	3	5	6	5	0	6	3	3	2	5

- \* 1年生は男女とも、2年生は男子の方に「分からない」「気にしない」「考えたことがない」と礼儀に対する意識が低い。
- \* 3年女子は礼儀の必要性を非常に意識していることが分かる。
- \* 2年女子は「時期だからあたりまえ」「大人は理解していない」と大人の忠告に反発的な意見が多かった。

### 3 理論研究

#### (1) 道徳と礼儀について

礼儀・マナーについて定義的にとらえると、人間関係上、なくてはならない潤滑油と誰でもがとらえているけれど、さて、今時の中学生はどうだろうか。昔のようにしつけの一貫として、厳しく教えられた時代とは違い、現代はその価値観の多様化により、そのしつけもしつけ方も考え方も様々に変わった。例えば、言葉遣い一つにしても、昔は男言葉、女言葉がはっきり使い分けられていたし、身分によっても、目上の人に、目下の人に、そして同年輩にと対する言葉が違っていた。その他、立ち居振る舞い、歩き方、仕事の内容、仕事の仕方、手順、等等…。家庭や地域で教えられ、習慣化されて、自然と身につけてきたことが、現在は時代にそぐわないものは次々と捨て去られ、忘れられたようだ。

確かに、時代と共に生活様式は変わるし、それと共に、価値観も変わってあたりまえである。しかし、変わってはいけない良いものもあるはずである。美しい言葉、正しい人間関係のあり方を示す方針となるべきもの。主観ながら、それらを失わせたがために、現在は潤いも情緒もなくなってしまったのではないかと思うのである。生活の向上、物の豊かさ、合理性、能率性の尊重、自由と平等の名のもとに、人間関係がぎすぎすしだして、相手のことを思いやっていたは生きていけない時代になってしまった。受験戦争、就職戦争、皆平等だから少しでもチャンスをつかむために、相手をけ落とし、自分だけ特別という自分中心の競争社会、有り余る自由の中でまだ満足できずに自由を求め、自分を制約するものを猛烈に排除しようという自我意識、

合理的で便利な生活を送るための財産（お金）所有欲，そこから生じる合理的考えから自分に有利にならないもの，むしろ，邪魔なものを排除する非人間的行為などである。家庭の教育はいかに他人より優れた地位にたつか，その方法一点にしばられる。反して，その競争についていけない家庭ですら，学歴一偏主義に染められ，個性を失い，自信を失い，自分自身に誇りをもてない。

そんなぎすぎすした人間関係から得られるものは何もない。失人間性をいかに救うか，これが今日の教育の課題だと思う。そして，家庭・地域社会できちんと教えなければならないしつけ（礼儀・マナー）も学校教育にはいりこんでしまった。言葉遣いやあいさつ等あたりまえにできなければならない年代の子供たち。思春期までに身につけていけば難なくできるはずのことを，この年齢になって，むりやりしつけようというのは，指導する方も難しい。

そこで，かつての「しつけ」ではなく，道徳の項目として，型にはめずに，自然と「やるべきこと」だと深く納得させ，子供の心にその思いを内面点火させ，人間として正しい生き方に目覚めさせ，実践力をつけさせなければならないのである。

ここで，「道徳の時間」と「生活指導」，「しつけ」についてまとめてみたい。次のページの図および，文章は「中学校若い『道徳』の先生に」（古田嘉彦著）を参考にしたものである。「道徳（時間）」も「生活指導」も「しつけ」も最終のねらいは，「正しい生き方の指導」をめざすことである。しかし，指導の考え方や，みちすじにおいては，色合いがちがう。

「しつけ」は，正しい生き方の尺度となるものを，教師とか親が，外から教えこんだり，型にはめて，子どもを育てようとする考え方にたつものである。長所は型がはっきりしていて，理解しやすく，誰にもあてはまる法なので，生き方の指針としては安心して受け入れられ，実行できる。子どもが幼ければ幼いほど素直に取り入れ，善悪の判断の根拠とすることができる。しかし，物心ついた子どもにとっては，切実感をもってうけとめられなかったり，自主性の芽をつみとるおそれもあり，また，戦後よりこのかた指導している教育方法からその価値観がうすいと考えられ，軽視されてきた。古田嘉彦氏は「幼稚園や小学校一，二年ごろまでの権威道徳時代にはもっと，しつけをとうしての指導をすることが必要である。さらに，小学校高学年，中学校でも時に，正しいあり方を教え込み，正しいしかたの指導をしなくしてはならないことも忘れてはならない。」と釘をさしている。

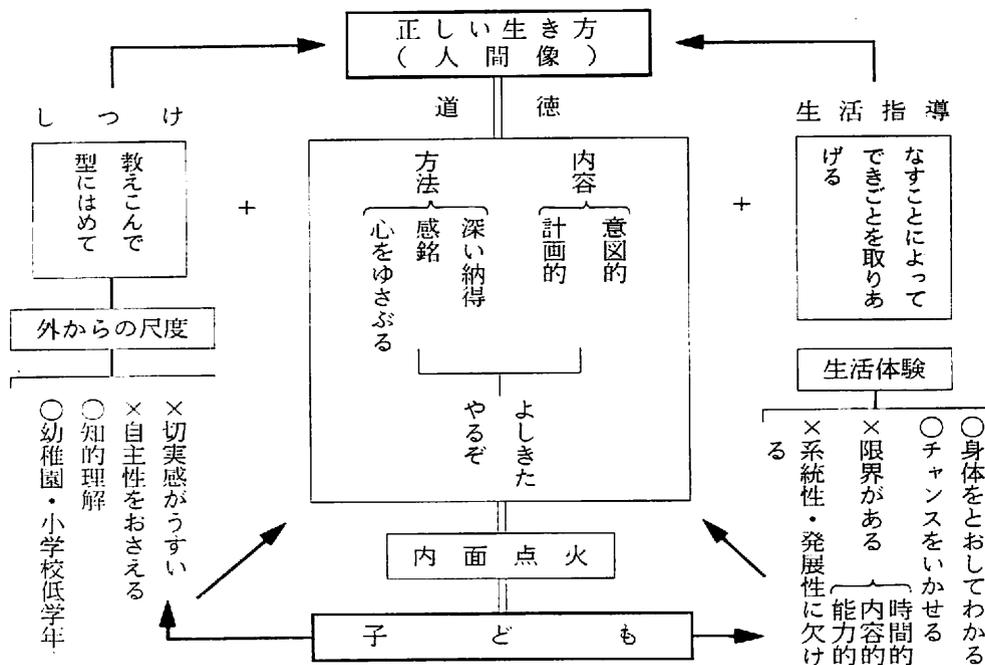
「生活指導」は戦後から今日までの教育において，重視され，強調されてきた。これは行動を通して，あるいは出来事を取りあげて正しいあり方を指導する。という考え方が基本になっている。「しつけ」のように頭から決めつけ，教えこむのとは違い生活体験を通して自分で分かるから，子どもも納得できる。そして，日常生活の全機会をとらえた指導ができるという長所がある。反面，問題としてとらえる瞬間と扱う時間のかねあい，とらえた問題の内容的価値が適切かどうか，資料収集，準備の時間，指導法の研究等の能力の限界があることも否めない。そこで，偶発的でその都度的に終わりやすく，指導の統一性とか発展性を期しがたいことに問題がある。

「道徳の時間」は，子どもたちに「人間の生き方と高い価値観」を意図的，計画的に指導で

きることからして、内容的に生活指導の弱さを補う面としての長所がある。また、一方的に型におしつけたり、上から教え込むのではなく、子どもが、自分で自分の心に感銘を覚え、心をゆさぶられ、深く納得してやるぞという、実践意欲を燃え上がらせる場を与えることによって、しつけの弱さを補う面をもつ。

要するに、道徳の時間は生活指導・しつけの良い面を取り入れた指導ができ、三者は互いによいところを生かし合い、足りないところを補い合っるとともに子どもの道徳性を高めていこうとするものであることが分かる。

例えば、礼儀に関していえば、どうしても、しつけ面が大きく前面にでてくるが、それを上から型にはめて教え込むのではなく、子どもの生活体験より、考えさせ、その価値や必要性を納得させて実践力まで導いていく過程をおろこまねばならないのである。



(図「中学校 若い『道徳』の先生に」古田嘉彦著より)

## (2) いじめと礼儀指導

礼儀と言っても、いろいろある。儀礼的なものもあるし、日常的なマナーもある。法律的に縛られるものでもないから、やってもやらなくても、かまわない。相手にどう思われようと、相手がどう反応しようがこっちが気にさえしなければ、いいのである。ようするに、すべてこちらの意向に任されているのである。しかし、問題は、今日のように、あまり他人に関わりたくない人が増えると、それぞれの世界の中で自分が中心なので、社会的に生活せざるをえない人間は、ちょっとしたことで、誤解、曲解を生じ、争い、いざこざに発展していくのである。

ここで生徒達の日常の中で起こる事件を検討してみよう。

Aさんは小学校からの友人を多くもっている。明るくおしゃべりで、言いたいことははっきり言えるしっかりした子である。中学校に入学して小学校から特に仲の良かった三人と同じ学級になりとてもよろこんでいた。ところが、しばらくたつうちに、他の三人が自分に対して思いがけない態度をとるようになってきた。まず、弁当箱を自分がいないときに開かれてのぞかれてしまう。おかずを一つ二つ食べられてしまう。中身をぐちゃぐちゃにされてしまう。おいしいおかずを作ってくるよう要求される。お茶等の準備を強られる。…初めの中は笑いながら、たわいもない友人同士のおしゃべりやいたずらの中でおもしろがりながらはよりの遊びの感覚でやっていた。Aさんは友人思いのやさしい子であったと思う。いやだなあと思っても、すぐ許せし、人に使われるのも鍛錬だと自覚していた。一応、やめてよ。いやだよ。と意思表示はしている。いたずらはたしかにおもしろい。相手が困っている様子を見てよろこぶ気持ちも、特に友人であれば一緒に楽しんでいる様子も見られるのでかわいそうという罪の意識は感じられないのである。こういう状態が続いていくと、心が麻痺してしまうのか、どうせ許してくれる。という友人に対する安易な気持ちからその行為はエスカレートしていくのである。移動教室のとき持ち物を持たせ、技術の作品を手伝わせ、持ち物を隠し、公衆の前で歌を歌わせ、いやだけど友人だから、我慢していた彼女にも限界がきた。それらはさも仲良しのグループ中のいたずら、はよりの遊びとして他の人たちには映ってはなかったろうか。現にAさんでさえそれがいじめであることに気づいたのは、他の友人があの人から直接聞いて本人に知らされてからである。

(「私のいじめられ日記」土屋怜・土屋守著 参考)

仲の悪い友人同士の垣根のない付き合い。一見心の隔てのない美しい、うらやましい友情のようにみえる。しかし、慣れ合ってみると、けじめのないその付き合いは相手の心に土足ではいることにも通じる。「親しき者にも礼儀あり」と、いくら友人でも触れていけないこと、言っではいけないこと、やっていけないことをわきまえていないとその友情の長く続かないことを彼らは知らない。自己中心に育った者は自分の尺度で物を考え、自分がおもしろいことなら友人もおもしろいととらえる。相手も深く追求するのも面倒くさく、互いに心を思いやることなくすまそうとする。結果は一方が強者、一方が弱者に位置が確定され、知らないうちに「いじめ」の構造が出来上がる。それは端から見てもほとんど気づかないところが危険である。

仲の良い友人だけではない。知らない者同士でも、例えば、廊下でぶつかって謝らない。おとなしい子はムッとするが我慢する。でも、気持ちは治まった訳ではない。短気な者はカッときて、殴りかかる。そこで、ケンカになる。一言の「ごめん」をわすれたために…。また、友人だからといって、かってに物を借りる。借りて返さない。取った、取られたといざこざが起こる。友人に関する噂話。事実を確かめないうちにうわさが先行する。相手の悪口の言い合い。等等…。繰り返すが、先の例のように、あまり親しすぎると、周囲もただの仲のよい友人同士のふざけ合いとしか見ないので、いじめが潜行していくのに本人も端も気づかないこともある。中学生のマナーの悪さは本にもなるくらいひどいものだ。(「若い奴は失礼」小林道雄著)周囲の大人を大人とみていないので、(あるいは、大人自身に失望しているのかも知れないが)注意しても聞かない、反発する。そ

の態度たるや傍若無人である。公衆の面前で大声でしゃべる。人の悪口をいう。物を食べながら歩く。お菓子の包みを道にすてる。そのだらしなさは服装にも表れている。制服をまともに着れない。時間が守れない。校則を平気で破る。道徳心・節制に欠けるのである。

人のことを考えない。あるいは頭で分かっているにもかかわらず身についてないので、どうしたらいいのかわからないのである。恥ずかしいのかもしれない。

礼儀は相手の心・人格を敬うことである。自分さえよければ他の人はどうなってもよいという考えではこの世は住みにくい世となろう。若いときから人の立場に立って考えることを学ばせるべきである。礼儀は習慣化すれば、なにも堅苦しいものではない。相手を大切する心があれば、それは形となってあらわれる。その心は相手の心を柔らかく、やさしくさせるだろう。中学生のうちはまだまだ権威道徳時代である。形から心も育つことを教えたい。

また、ちゃんとした規律の中では子どもたちは安心して生活できる。他の人を信じられるからだ。安心の中で人は自由に物が言え、自由に行動でき、本物の個性が発揮できるのである。

### (3) 道徳指導過程の定型

指導過程の定型はいろいろ考えられるが、「中学校 若い『道徳』の先生に」(古田嘉彦著)を参考に礼儀について作ってみると、三段階七変化の指導法があげられる。

三段階とは、導入(意識化)・展開(内面化)・終末(実践化)の三つの大きな区分段階と導入から終末までの進め方を七つの内容と角度づけをして指導を深めようとするものである。

「中学校 若い『道徳』の先生に」(古田嘉彦著)参考			*本テーマ分析		
三段階	七 変 化		礼儀・節度と思いやりについて		
導 入	意識化	生活	見つめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の現実実態をみつめる。</li> <li>・その中に、どんな問題があるかに気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめの実態</li> <li>・友人とのケンカ、仲たがひ</li> <li>・盗難、恐喝</li> <li>・言葉遣い、あいさつ</li> <li>◎人を人と思っていない。</li> <li>◎場に応じた言動ができていない。</li> <li>◎友人を事件に巻き込んでいる。</li> </ul>
		問題	気づく		
展 開	内面化	分析	しぼる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その原因は何か、中心的事項は何かに焦点づける。</li> <li>・より望ましいあり方を多面的に考え合う。</li> <li>・先人の歩みにてらし、確かめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分中心の考え方。</li> <li>・人間尊重の精神の欠如。</li> <li>◎明るいあいさつ等を交わし合い、普段の付き合いをなごやかにする。</li> <li>◎親しい友人にもけじめある接し方をする。</li> <li>◎言葉遣いを正し、誤解されないように気をつける。</li> </ul>
		価値	考える		
		理想像	てらす		
終 末	実践化	対策	決める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先の問題点にどう対処するのがよいかを決める。</li> <li>・日常生活実践と結ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*人間尊重の精神を培おう。</li> <li>*親しき仲でもけじめはつけよう。</li> <li>*相手の立場になり思いやりの心を持つとう。</li> <li>◎毎日の生活で常に実践できるよう心がける。</li> </ul>
		生活	行う		

#### (4) 日常の道徳指導

道徳は週一時間の道徳の授業のみで行うのではない。普段の生活の仲でも随時に取り入れるべきである。学級経営の柱となる学級目標にも必ず、「はじめある学級」とか、「仲の良い学級」「思いやりのある学級」等取り入れている。

そこで、特に、礼儀に関する指導を日常の学級指導の一貫として、考えてみた。

##### ① 言葉遣いを正す。

- ・やさしい敬語を身に付けさせる。(～ます。～です。～下さい。)
- ・公の場所や第三者として扱う時は、親しい友人でも「～君～さん」と敬称をつけて呼んだり、表現したりさせる。
- ・相手が聞き取りやすい言葉や言い回しに気をつけて話せるようにする。
- ・忌み言葉、卑猥な言葉、粗雑な言葉は使わせない。

##### ② 挨拶を励行させる。

- ・朝、帰りのあいさつをさせる。(友人間でも必要なことを教える。)
- ・授業の始め、終わりのあいさつは徹底してさせる。
- ・声を出すあいさつと会釈だけでよいあいさつの時と場にあったやり方を教える。
- ・あいさつが返されなかった気まずさとそれを克服して、さらに、励むことの大切さを教える。

##### ③ けじめをつけさせる。

- ・教師(教える者)と生徒(教えられる者)との関係をはっきりさせる。
- ・友人の人格と個性を大切にすること。
- ・友人の生活や心に踏み入ったり乱したりしてはいけないこと。
- ・友人の悩みにはあまり、立ち入らないこと。(相談を受けたら、愛情をもって聞いてやるだけにすること。)
- ・物の貸し借りには礼を尽くすこと。(借りた物は早めに返し、やってもらったことに対してはきちんとお礼を言う。お礼をする。)
- ・約束は必ず守ること。
- ・友人を使い走りにしないこと。・・・等を教え、学ばせる。

##### ④ 中学生であることを自覚させる。

- ・泣かないこと。(感動の涙は素晴らしい)
- ・口論はしてもケンカしてはいけないこと。
- ・粗暴な行為、幼稚な行為はしないこと。
- ・相手を陥れる告げ口はしない。悪口は言わない。
- ・悪に対して勇気をもつこと。(自分や友人が困っている時は助けてくれる大人を頼ること)

- ・読書すること。
- ・自分の利害ばかり考えないこと。
- ・心や体を鍛えるため進んで難儀に挑戦すること。

⑤ かけがえのない自分を愛することを教える。

- ・自分の命は一つしかないこと。
- ・その命を託す子孫を創らないうちに死なないこと。
- ・その命はその前の何億という膨大な自分の祖先たちから受け継がれたものであるので自分一人のものと考えて粗末にしないこと。
- ・自分の人生のドラマは自分で創るので、未来を信じて明るく生きること。
- ・悩みや苦しみは誰もがもっているもの、人間誰もが通る道であることを知ること。
- ・かけがえのない自分を愛することは、同じようにかけがえのない自分を愛している他の人を認め、大切にすること。
- ・自分を大切に→友人を大切に→人間を大切に生きること。

\* 以上①～⑤まであげたが、学級指導の中にこれだけは入れてほしい。そして、道徳の授業にも必ずとって意識化させ、これまでの低い道徳的価値を高い価値にしてほしい。あまりにも粗雑で幼稚、低次元で生活している子供たちを大人にしあげ、いじめ等のない安心して生活できる学校なら個性ものびのびとし、学力も向上するであろう。

\* 中には礼儀と直接関係ないものがあるが、いくらかわがままにブレーキをかけ、節度をわきまえる態度が必要だと考えた。

(5) 道徳資料について

① 種類 ア読み物

- ・文学作品
- ・創作物語
- ・寓話
- ・童話
- ・日記
- ・手紙
- ・作文
- ・評論
- ・新聞記事
- ・雑誌
- ・伝記
- ・昔話
- ・随筆
- ・感想文
- ・生活記録
- ・副読本
- ・文部省資料
- ・その他

- \*手近で求め易い
- \*価値をより深く見つめることができる。
- \*繰り返し触れることができる。
- \*数・種類が豊富である。
- \*必要に応じたアレンジが容易（可能）

#### イ 視聴覚資料

- ・VTR ・テレビ ・スライド ・紙芝居 ・録音テープ ・ラジオ
- ・TP ・写真 ・絵画 ・映画 ・パネルシアター ・統計図表

- \* 子供の興味・関心を高めることができる。
- \* 理解を容易にさせる。
- \* 感情に強く訴えることができる。
- \* 正しい情報をあたえることができる。
- \* 臨場感があり、真迫性を持っているため、資料に集中する。
- \* 部分的揭示や分割などの操作が容易である。
- \* 授業に変化をつけることができる。

#### ウ 説話

- ・教師の体験談 ・生活的な問題 ・ことわざ ・時事的な問題

- \* 子供の心に強い感動を与えることができる。
- \* 深みのある内容を端的に、短時間に示すことができる。
- \* いろいろな方面から収集、選択することができる。
- \* 子供の反応に合わせて、柔軟な授業を展開することができる。

#### ② 資料の与え方

ア 生徒の発達段階において考えるべきである。

イ 生徒をとりまく社会や友人、物質環境を考えるべきである。

ウ 生徒個人および生徒集団の興味・関心を考えるべきである。

#### (6) 指導方法

##### ① 話し合い

- ・全体 ・グループ

- \* 子供個々の問題意識を高めることができる。
- \* 集団としての意識を高め、共通理解を深めることができる。
- \* 視野が広がり、自分自身を理解する手がかりとすることができる。
- \* 教師が個々の子供や学級全体の傾向を把握することができる。

##### ② 役割演技

- ・ある問題を含んだ場面の中で役割を与え、即興的に演技させる。
- ・読み物資料をナレーション、登場人物と役割を与え、筋の流れを読んでいく。

・台本を作り、演技をする。

- \* 他人の立場を理解すると同時に、自分の立場を自覚し、自立の態度を育てることに役立つ。
- \* 仲間との相互理解や信頼感を深め、望ましい仲間意識を育てることができる。
- \* 抽象的・観念的になり易い内容でも、演技を通して具体的に考えることができる。
- \* 体験的に現実を見つめることによって、自ら望ましい行動を選択し、実践しようとする意欲を高めることができる。

### ③説話

前記

### ④①～③の合併したもの

「授業技術実践シリーズ3 生きた資料の活用 道徳」 山口 理 (国土社) 抜粋  
「中学校 若い『道徳』の先生に」 古田嘉彦 (黎明書房) 一部参考

## V 研究のための主な参考文献

- ・「中学校新教育課程の解説 道徳」 安澤順一郎著 (第一法規)
- ・「中学校新教育課程を読む 道徳の解説と展開」 安澤順一郎著 (文部省教育課程研究会)
- ・「新学習指導要領の指導事例 中学校道徳  
2『主として他の人とのかかわりに関すること』」 安澤順一郎著 (明治図書)
- ・「授業技術実践シリーズ3 生きた資料の活用 道徳」 山口 理著 (国土社)
- ・「有田学級の『道徳』の授業」 有田和正著 (明治図書)
- ・「中学校 若い『道徳』の先生に」 古田嘉彦著 (黎明書房)
- ・「心の教育 日本教育の再発見」 沖原 豊著 (学陽書房)
- ・「反抗期 中学生の心理 自分中心主義の子どもたち」 望月一宏 (あすなろ書房)
- ・「若い奴は失礼」 小林道雄著 (岩波書店)
- ・「内容項目の研究と実践 中学校道徳6 2-(1) 礼儀」 安澤順一郎著 (明治図書)
- ・「中学校読み物資料とその活用『主として他の人とのかかわりに関すること』」 (文部省)  
平成4年3月
- ・「ことば」シリーズ1「敬語」、2「言葉のしつけ」、3「統敬語」(文化庁)

# 道徳指導案

日時 平成6年12月16日(金)

学級 浦添中2年5組

授業者 濱比嘉 五十美

## I テーマ 「礼儀の心を育てる」

－礼儀・節度・思いやりを育てるために－(本研究テーマ)

## II ねらい

礼儀の意義を理解し、時と場に応じた言動のとれる判断力を高める。

[ 2-(1) ]

## III 資料「道徳教育推進指導資料(指導の手引き2)中学校読み物資料とその利用

－『主として他の人とのかわりに関すること』－

(平成4年3月文部省)

## 十二 立ち読みおことわり

## IV 設定理由

中学生のこの時期は、自我の目覚め、反抗心の表れとともに、これまで培ってきた良いあいさつや言葉遣いなど、一旦、壊して自分の価値観を育てる時期でもある。そこには、ちゃんとしたことをやる気恥ずかしさ、はにかみ、また人と違うことをするカッコよさ、小気味よさがある。しかし、彼らの感性は自己中心的であるので、それがぶつかり合うと粗野、野放図、野蛮な言動がはびこり、友人からこ誤解、曲解、そして、大人たちからの白い目の違和感に、結局は自分が傷つくことになる。

無言社会と言われる今日、自分の失敗や過ちをたとえその心があっても、「ごめんなさい」と言えない者。親しいからといって、相手の心の中に土足で踏み込んで平気な者。相手の身になれば分かることも自分と置き換えて考えることをしない者。それぞれが、それらをしたり、されたりで互いに不満も持ちながら、何気なく「まあ、いいさ」で過ごしている。そこには人間としての思いやりも、尊重も何も育たない。他からの干渉を拒み、自分(自分たち)さえよければ的思考がはびこるだけである。このままでは、これまで培ってきた良き習慣、価値あるものに再びもどる前に人間不信に陥るばかりである。

日常の何気ないあいさつや笑顔の応対が人間関係を円滑にし、心を和やかにすることは誰でも知っているが、親しすぎて、言わなくても分かるだろう式の甘い考えや、乱暴、粗野な言葉遣いが相手本人のみならず周りの人々に与える不快感など、自分の心ない言動から生じるさまざまな誤解や思いもよらない事件を引き起こしていることを早めに気づき、その原因を考え、礼儀が相手に対する深い思いやり、人間尊重に基づくことを理解して、心のこもった接し方や礼儀の意義を確認させたい。

#### IV 資料および資料観

学校新聞に掲載された苦言に腹を立てた二少女が投稿を寄せたとされる商店主に反発して生意気な応対するために起こる騒動話である。

書店の主人は周囲近辺の人達とは幼なじみ、昔からこの地に根付いている人である。下町ふうな気安さで、誰もがざっくばらんで、中でもこの人は少々横柄でもどことなく人好きのする感じで、特に湘南中の生徒から「おやじ」「おやじさん」と親しみをこめて呼ばれている存在。その彼が日頃見慣れている生徒たち、特に女子の言葉遣いや礼儀に関して、大人として眉をひそめる思いや、大人としての責任感は強いものであろう。学校新聞に載った彼の正直な気持ちはこの生意気盛りの少女たちには伝わらなかった。彼女らは自分たちを反省するどころか場違いな反発をその主人にぶつけるのである。しかも、上品な言葉と相反する態度でもって。この二人の少女の言動は生徒たちの日常生活の中でも見られる。普段の生活の中で気軽には使えない思み言葉や粗野な方言、女子の口からポンポン出てくる男言葉を目の当たりにすると、大人としては嘆かねばならない。ところが、面と向かって教えようとするものならば、白い目でみられるか、一笑にふされることもある。

「人は誰でも他の人から好かれない、認められたいきもちがあるのに、思春期にかかった若い人は時々逆の行動をして、大人から『今時の中学生は』と言われたり、友人から誤解されてトラブルが起こったりするが、そのことについてどう考えるか。」と言うアンケートに対して、「ワジワジする。」「大人だって昔からいい子だったのか。」「大人は理解してほしい」が16%、「時期だからしかたがない」13%、「自分は間違っていないことを大人にはっきり言う」5%を合わせると、34%と反発が高いのである。ちなみに、「なんとも思わない」「気にしない」が42%もあり、それまで合わせると全く礼儀・マナーに関して、無関心であることが分かる。

世代間の価値観も大きく開くばかりの今日の状況において、しっかり子ども達をしつけなければならぬ大人達は背をむける子供達に閉口している。しかし、この書店の主人は「根は良い人」だからこそ、おせっかいにも彼女たちに口出しするし、また、最後あたりの敬語の教え方から察するに礼儀の根本を知っていることを主人公千春は見抜き、何ともバツの悪い思いをするのである。

#### V 副資料「よりぬきサザエさん」No.1

資料観・・・仲のいい姉弟も言葉一つでケンカしてしまう、典型的な風刺マンガである。マンガ世代の当生徒たちに、興味・関心をもたせ、授業に引きつけさせるのに最も適当な教材と考え、導入とした。

#### VI 学級の実態 2年5組 男子20名 女子18名 計38名

道徳適性検査から察するに、ばらつきのない似た者志向同士の集まりといえる。全体的に落ち着きがあり、学級もまとめやすいが、反面、覇気がなく、他人には無関心。動より静を好み、授業中も手を挙げて発言したりするということがほとんどない。男子は気が弱く、はにかみ屋。思っていることをうまく表現できずに誤解されることがある。女子はしっかり者だが、人のことには

あまり関知せず、独立独歩で着々といく方である。

礼儀の意義はよく心得ているが、うまく表現したり、行動に移すことができない生徒が多い。はにかみ屋で、明るいあいさつを交わす前に目をそらしたり、笑顔だけで、声が返ってこなかったりがあった。グループ間は少々距離をおいて接しているが、仲間内ではなれ合いによるいざこざ、例えば、人の物を勝手に借りるなども目立った。

学級間のばらつきもあるが、とにかく、粗野な生徒の多い中で2年5組はいたっておとなしく、特異なクラスである。

		男子	女子	全体
標準得点	60以上	1人	5人	6人
	50以上	12	9	21
	40以上	2	3	4
	30以上	3	1	4
5段階	5	0	0	0
	4	8	7	15
	3	7	8	15
	2	1	2	3
	1	2	1	3
総合判定	A	15	17	32
	B	3	1	4
	C	0	0	0

\*男子21名 女子18名  
計39名中未検者3名  
(男子)

・全国平均50点以上が27名  
・5はいないものの4、3が30名  
・総合Aが32名

## VIII 本時のねらい

- ア 礼儀の意義を知る。
- イ 時と場に応じた言動をすることを学ぶ。
- ウ 自分の言動を反省できる謙虚な態度を養う。

## IX 時の展開・・・次のページ参照

## X 評価

① 「礼儀はその根底に人間を尊重すること、思いやりの心の表れであることを理解できたか。」

生徒の感想をまとめると、大半が礼儀・節度の必要性を感じていることが分かる。感じのいいあいさつや言葉遣いはやってもされても気持ちのいいもの、互いの信頼関係を深めるもの、そして、なくてはならないもの、義務の一つであるにとらえている。

② 「なれ合いの中から生じる『けじめなさ』が人間関係を悪くしていることを理解し、これからの生活をよりよくしようという態度がみられるか。」

大半の生徒が友達関係、教師に対する態度のまずさをあげている。目上の人に対するのと同様に、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉をあげて、友人に対する接し方がいじめにも派生していくことをあらためて感じたい。「どんな人に対しても礼儀は大切である。」「礼儀がこんなにも人に影響を与えているのか。」「いくら友達でもそれなりの礼儀があったほうがその仲も得るんだなあ。」「言葉遣いなど目上・親しい友にかかわらず気をつけたい。」「心のやさしい人になりたい。」等、向上的な態度をうかがわせる意見・感想が多かった。

# 道徳指導案(細案)

日時 平成6年12月16日(金)

学級 浦添中2年5組

授業者 濱比嘉 五十美

## IV 本時の展開

	授業の流れ・主発問	指示・副発問	予想される答・反応	指導上の留意点
導 入	① 「サザエさん」4コママンガを掲示。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">                         サザエさんとカツオくんは何故ケンカになったのでしょうか                     </div>	① 4コマ目のフネさんサザエさん、カツオくんの言葉から想像して吹き出しに台詞を入れながら、考えましょう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言い方が悪いから。</li> <li>・互いに馬鹿にし合っているから。</li> <li>・もっと優しく言うべき</li> <li>・相手を傷つける言葉を遣ったから。</li> <li>・「むずかしいの」「見せてごらん」など、同情的に言えばいいのに</li> </ul>	① 同じ意味でも言い方一つで相手を傷つけ、ケンカになってしまふ例をとらえさせる。
展 開	② 「立ち読みおことわり」の役割演技。  ③ 弘美と千春の言動について討論。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">                         弘美と千春の言動についてどう思いますか。                     </div>	② ・1～3場面の登場人物をあげましょう。 ・各グループからひとりやってみたい役と役者を選んで下さい。 ・それぞれの人物の気持ちがよく分かるように表現してみましょう  ③ 二人の少女を支持する人、支持できない人それぞれ、ワークシートに意見を書いて、発表の準備をしましょう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弘美、千春、書店の主人、千春の父。</li> <li>・場合によっては台詞の読み合わせになる。</li> </ul> (生徒の実態に合わせてかえる)	② 臨場感を持たせるよう、それぞれの気持ちをしっかりとらえさせる。  ③ *いくら言葉遣いがよくても、心のももらないのは礼儀に反すること。 *仲の良い友達でも、他の人からみて不快な言動もあること。  *の意見に注意して生徒の変容を図る。
終 末	④ 「礼儀」についてのアンケートを提示。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">                         礼儀は何故必要なのでしょう。                     </div>	④ 「礼儀にかなったことをされてうれしかったこと、反対に失礼なことをされていやだったこと」を挙げてみましょう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係を良くする。</li> <li>・ケンカにならない。</li> <li>・社会が良くなる。</li> <li>・けじめができる。</li> <li>・自分が良くなる。</li> <li>・上品になる。</li> <li>・思いやりの心が育つ。</li> <li>・やさしくなる。</li> </ul>	④ なれ合いを許し合っているうちに失っていくものは何か、を考えさせる。  ・礼儀は人間尊重の表れであることを確認させる

## V 研究のまとめ

### 1 研究の結果

道徳の難しさをあらためて感じた。どんなに理論研究をやっても要は生きている子どもたちにどのくらい礼儀の必要性を実感させるか、である。頭で分かっていることでも、思春期の子どもたちのはにかみ、反発の障害を覚悟せねばならない。すでに、道徳性を失った子もいる。自分の身についた悪い生活習慣を捨てきれない子もいる。親や教師や大人たちに対して不信感やあきらめを持つ子もいる。

本研究は「礼儀」に関してだが、礼儀＝道徳ではない。しかし、道徳教育が目指すものは、「望ましい人間像」である。すなわち、「人間としての望ましい生き方」「人間としてどう生きるか」を子どもの低い価値を変容させ、人間らしい高い価値まで高めてやるかなのである。

その価値の高い人間らしさは、どんなところに芽生え、育つのだろう。人間不信に満ちた荒廃した社会には芽生えないし、芽生えたとしても、育つ前に枯らされてしまう。人間らしさは安定した生きることが楽しい社会に育つ。物の豊かさではない。物はなくとも、心が通じ、安心して好きなことが言え、好きなことができる社会である。規律があり、けじめがあり、自分が何をしたらよいか、はっきり自分の存在を確かめることのできる社会である。

規律があり、けじめがあるということは他の人を大切にすることであり、自分が大切にされることに通じる。「礼儀」はそれが形となって表れたものである。本研究でそれが確信されただけでもうれしい。とかく、「お堅い道徳の授業」と思われがちだが人間としてあたりまえの姿を映し出す一つ的手段として手軽に扱えるのではないかという気がした。

さきに挙げた様々なハンディは、これから研究していかねばならない課題ではあるが、日常の道徳や授業を通して、真の人間性を追求させるべきである。

### 2 今後の課題

- ① 幼児・小学校低学年の権威道徳時代にしつけられなかった子どもたちを中学になったこの時点で、どうしつけるか。
- ② 分かっているもできない思春期の子どもたちにあたりまえに「礼儀」をわかまわせるためにはどうしたらよいか。
- ③ 彼らの集団社会の安定を保証し、つくりあげるためにはどうしたらよいか。
- ④ 家庭への啓蒙、地域との連携をどう工夫するか。
- ⑤ 規律面の徹底と犯罪へつながっていく生徒の行動・価値判断の見直しをどうするか。
- ⑥ 未来の社会人としての自覚をどうつけさせるか。

上の項目をさらに研究していきたい。(特に⑤は「軽犯罪」の授業を通して罪の意識を高めさせたい。)